

した。私たちも、引き受けなければならぬ試練・困難がどんなに厳しくとも、主の恵みによって支えられ、助けられ、見事に引き受け、復活の主を告げ知らせることのできる人生を生きるものでありたいと思います。

受難節に思うこと

河野まり子

今年のイースターは三月二十七日で例年より少し早いです。二月一四日から受難節に入り、私たちは主の受難を覚える日々です。昔「パッション」という映画を見たことを思い出します。英語やドイツ語で受難という意味です。

メル・ギブソンという男優がキリストの役を演じていました。映画はゲッセネマの森で祈るイエスがローマ兵に捕らわれるシーンから始まります。その冒頭から終始イエスが肉体的に苦痛と侮辱を与えられる様子が非常にリアルに描かれて

います。捕らわれて引きずられていく様子でさえ、鎖に繋がれ一歩一歩の痛みを耐えながら引きずられていくのを見てみると、見ている私たちにその痛みと苦しみが伝わってきます。頭に茨の冠をかぶせられ、そのとげで頭は血まみれになり、鞭打たれるシーンが繰り返されその壮絶さは忘れられません。その最たるシーンは十字架に釘打つさいに、しっかりと固定するために釘を打ち付けてから十字架を反対にイエスともどもひっくり返すシーンでした。

イエス様が身代わりに苦しみを受けてくださったという言葉は教会生活の中でしばしば聞くので、「あー、私たちのために苦しんでくださったのか」と事実を観念的にしかとらえられていなかったことを痛切に思いました。

受難節を迎えるたびに、この映画とイエス様の苦しみ大きさをも身をもって思い出します。



J.S.Bachの作品の中に「ヨハネ受難曲」があります。バッハの作品の中でも大曲で有名な作品です。

ソリスト歌手、オーケストラ、合唱によって演奏されるオラトリオ作品です。何度か私も演奏しましたが、もっとも印象に残るのはイエスが息を引き取られたあとの「天地が裂け、雷鳴が轟きわたる」を表現するのにバッハはテノールの福音史家とオーケストラ全員に激しい音楽を作っています。オーケストラは全員がいきなり大音量で細かい音を繰り返すのです。この部分を演奏すると聖書に書かれていることを実感します。

復活は神様の贈物

黒田正純

「バプテスマによって、キリストと共に葬られ、またキリストを死者の中から復活させた神の力を信じて、キリストと共に復活させられたのです。」

コロサイ書二章一二節

五三年前、復活祭礼拝に洗礼を受けた。二歳の時だったが、私の心はあるのに、働きながら悶々とした思いで、少しばかりのものを仕送りしていた。そんな苦しい私を、全部神様にお渡しして、洗礼を受けさせて頂いた。その時、私の苦しかった過去は、真っ白になった。

心が楽になったことを覚えている。

その頃、読んでいた戦後文学の椎名麟三さんの文章に次のような個所があった、まるで私の思いを書いてくれたように思ったものである。「復活のイエスの贈物をもたらした人間は、死んでいて生きているという仕方

の原点、私の人生の新しい出発になった。



橋本晶子さんの

受洗ごよかけ

土橋 薫

このたびは、晶子さんご受洗おめでとうございます！

晶子さんが奏楽してくださるようになって、もう何年たったことでしょうか。

わたし自身が長く教会に出入りしておりながら、受洗に至るまで大変長い時間がかかったこともあり、晶子さんにもいつかと思いつながら、あまり積極的に受洗をお勧めしたことはなかったのですが、今回木戸先生のお勧めによって受洗を決意され、いよいよこのイースターの日に島之内教会の会員になってくださること、心よりうれしく思います。

晶子さんとは、高校生の時にピアノの先生に連れられてオルガンのレッスンを受けに来られたのが最初の出会でした。めでたく大阪音楽大学のオルガン専攻に入学され、わたしがレッスン担当になりました。音楽大学では専攻の個人レッスンは4年間ずっと毎週あるので、師弟関係はいわば普通の大学のゼミナールの指導教授とゼミ生と同じように、あるいはそれ以上に濃い関係になります。晶子さんのことは、初めてお会いした時から、背が高く元気な方でバイオリンを弾くにはもってこい、いろいろと恵まれておられるなと思いました。しかしその一方で、学生の時から元気で勉強熱心なのはよいとして、時々脱線？というか、ちょっとはらはらさせられることも多くありました。時には結構厳しいことを言わせていただいたこともあったと思います。

私さまからの大きな恵みと測り知れない贈物。あの時の復活祭は、アイルランド民謡の、春の日の花と輝く”の美しい歌のように、若き日の純粋な信仰を思い出させてくれる私

生きはじめなのだ。端的に言えば、キリスト者は復活者なのである。さらにいいかえれば、イエス・キリストを信じるものは、すっかり救われるかというところではないということだ。救われていないし、といって救われてもいるという仕方

生きは、主の復活に預かって、救われた年月を七四年間積み上げて、今まで生かされた。

復活祭を迎えるごとに、私の人生を刻印している思いで、心は喜び晴